

# 交通心理学における検討課題

中京大学心理学部 神作 博

中京大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程 大谷 亮

中京大学心理学部 向井 希宏

## Current Problems in Traffic Psychology

KANSAKU Hiroshi (School of Psychology, Chukyo University, Yagoto-Honmachi, Showa-ku, Nagoya, 466-8666)

OHTANI Akira (Graduate School of Letters, Chukyo University, Yagoto-Honmachi, Showa-ku, Nagoya, 466-8666)

MUKAI Marehiro (School of Psychology, Chukyo University, Yagoto-Honmachi, Showa-ku, Nagoya, 466-8666)

A number of problems in traffic psychology require solution in order to establish its position as a scientific and academic discipline and to foster its contribution as an applied science to the meeting of urgent community needs.

The establishment of traffic psychology as an academic discipline requires: (a) an agreed definition of traffic psychology, (b) systematization of the various fields of traffic psychology, (c) documentation of its history, and development of its research methodology, (d) agreement on terminology, and (e) determined action by the Japanese Association of Traffic Psychology to address these needs.

As regards the social contribution of traffic psychology, two areas of the discipline are considered, one highly special and one more general. In both areas, a lack of systematization in the teaching of traffic psychology has been acknowledged and debated. Areas in which knowledge and training are indispensable for the present day application of traffic psychology include: foundations of psychology, educational psychology, clinical psychology, developmental psychology and the psychology of domestic relations, counseling, attitude theory and practice, testing theory and practice, traffic safety psychology, methodology of traffic psychology, social psychology of traffic, traffic education and training, organizational behaviour in traffic psychology, technique and practice of traffic education, group dynamics in traffic education, human engineering in traffic research, analysis of traffic accidents, group counseling in traffic education, clinical psychology and welfare in traffic psychology, role-playing techniques and practice in traffic psychology.

**Key words:** traffic psychology, discipline of traffic psychology, specialist of Traffic psychology, education about traffic psychology

## 1. まえがき

交通心理学は、(i) 航空機の飛行・運航を中心とする心理学的諸問題を扱う航空心理学、(ii) 船舶の航行・航海を中心とする心理学的諸問題を扱う海上交通心理学、(iii) 陸上交通心理学からなっている。(iii) の陸上交通心理学は、さらに、①電車・列車の運転・運行を中心とする軌道交通(鉄道)心理学、②自動車の運転・走行を中心とする道路交通心理学に細分される。

航空心理学は第二次世界大戦前から終了時までの間、各国とも全力をあげて研究に取り組み、その成果にはかなりのものがある。この流れはその後宇宙開発へと繋がり、さらに大幅な発展をみた(近年の

これらの活動・成果に対して「宇宙心理学」という名称を付している学者・研究者も存在している)。また、航空心理学の成果は軌道交通(鉄道)心理学や道路交通心理学へかなりの影響を及ぼし、特に後者の進展への影響は大きい。現在は名古屋大学環境医学研究所、文部科学省宇宙航空技術研究所、防衛庁航空医学実験隊等で研究が進められている。

海上交通心理学については、この心理学に関する研究専門機関はわが国には存在せず、海上労働科学の一環としてわずかに研究が進められているにすぎない。大学にて教職等に従事するかたわら若干の学者・研究者によって特定の研究課題についての成果が公表されているのが現状である。航行・航海の安全に関しては海難審判庁が国に設置されており、責

任・義務との関連において法的措置がとられるが、その裁判の関係で、ある時点において特定の研究プロジェクトが遂行されているのが目にとまる。

軌道交通心理学はわが国においては、旧国鉄鉄道労働科学研究所および現 JR 総合研究所を軸に数々の研究が遂行され、その成果が世に出されているが、研究の絶対数としてはさほど多数とは言えない状況である。最近、JR 東日本等において安全関連の研究も設置され安全心理学の観点よりの研究も遂行されつつあるように感じられる。

道路交通心理学は、専門の研究機関としては警察庁科学警察研究所に交通部交通安全研究室等があり、数名の研究員により交通心理学の研究が実行されつつある。この他に特殊法人自動車事故対策センターおよび自動車安全運転センター、ならびに財団法人自動車研究所と自動車事故分析センター等の交通関係機関があり、ここに所属したり関係したりしている学者・研究者等により研究や調査・実験が遂行され、その成果は斯界に大きく貢献している。

日本交通心理学会は道路交通問題を主として取り上げ、それに関連する研究成果を公表しており、会員はおよそ 350 名ほどである。

1988 年頃までの研究成果の概要は成書にまとめられ公刊されている。道路交通には関連する領域の人も多く、交通心理学・人間行動に関する事柄も数多い。実践に関するものは日常数々の領域・箇所において行われてきている。しかし、組織的研究となると意外に少なく、即時的、即物的に対症療法的に行われているに過ぎない。

総じて交通心理学は、関連する学者・研究者・技術者も少なく、その内容も次に述べるように未だ明確化されていないのが現状である。

## 2. 交通心理学における問題点（総論）

### (1) 学問としての交通心理学

交通心理学が学問として真に独立し、広い意味での学問体系の一翼を担うとすれば、当然のことながら、(i) 定義の決定・制定、(ii) 交通心理学内の体系あるいは骨格の制定、(iii) 歴史の明確化、(iv) 研究方法の考究と開発およびその総覧、(v) 専門用語の制定、(vi) 教育体系の決定と制度の整備、(vii) 他国の交通関係研究団体との関係樹立、(viii) 国内他学問領域との関係樹立、(ix) 日本交通心理

学会の整備および学問的位置づけ、(x) 研究成果の公表（①研究雑誌の刊行、②年度毎の研究発表会の開催ならびにその成果集の刊行、③事典の刊行、④ハンドブックの刊行、⑤講座、叢書の刊行）、(xi) 社会貢献（①高度な専門性の発揮による貢献、ならびに②一般的専門性発揮による貢献）、等をかかなりの程度、独力で遂行出来得ることが求められよう。

現状を眺めてみるに、狭い活動範囲ながらしかもやや断片的にはあるが、次に記すような諸項は既に行われてきているように思われるものの、それ以外は未だ公的には成果の形で表れてきてはいない。

①道路交通中心ながら<sup>\*1</sup>「日本交通心理学会」が設立され、すでに 20 年以上の歴史を有している（しかし、未だ法人組織とはなっておらず、法的・社会的な法人資格を取得していない）。

②国際交流については、1990 年京都において開催された第 22 回国際応用心理学会にて日本の交通心理学の研究の現状は報告されており、以来、日本交通心理学会では部内に国際交流委員会が設置され活発な国際交流が展開されている。本年（平成 13 年）11 月には仙台において第 2 回日本・北欧交通心理学会が平成 13 年度秋季（第 64 回）日本交通心理学会全国大会と併行して開催されることになっている。その他、個々の研究者・学会員レベルでは国際交流も盛んに行われている。

③研究成果の公表としては、現在、毎年研究雑誌「交通心理学研究」が刊行され、既に第 16 巻に達している。また、従来学会における研究発表を基として、成書「安全運転の人間科学」（第 1 巻～第 3 巻）<sup>\*2</sup> ならびに「安全運転の心理学」（第 1 巻および第 2 巻）<sup>\*2</sup> の計 5 冊、加えて、「交通安全のための Q & A」<sup>\*2</sup> も刊行されている。

以上の①～③以外については、残念ながら未だ発想がないか未着手、あるいは確かな形で表面化されてはいない状況と言えよう。

### (2) 応用心理学としての交通心理学

交通心理学は応用心理学の一分野であり、応用心理学としての“実践”的な目標、特徴は当然必須のこととなる。

実践的な行動としての社会的貢献の最たるものとしては、①交通事故防止、②人員と物資の輸送・流通の円滑化・促進であるが、この双方とも、他の学問分野や行政との連携の深い問題であり、交通心理

学がその主導権を握るには至ってはいない<sup>\*3</sup>。

交通心理学が学問の性格上可能と考えられる社会的貢献の一つとしては、前記の通り、①高度な専門性の発揮による貢献、および②一般的な専門性発揮による貢献があると思われる。

#### A. 高度な専門性発揮による社会的貢献

高度な専門性発揮による社会的貢献としては種々のものが考えられ、今後も社会の発展に伴い次々と要貢献テーマが現れてくると予想されるが、今日までの社会的貢献の内の主要なものを挙げてみると、次のようなものがあると考えられる。

- ①交通関係者に対する交通心理学、交通安全心理学関係の教育実施・後継者の育成,
- ②交通関係裁判への専門的見地よりの「論拠」,「証拠」,「関連実験データ」の提出<sup>\*4</sup>,
- ③交通事故調査法についての助言・支援,
- ④交通事故調査に関しての助言・支援,
- ⑤交通関連法規制定への助言, ならびにその関連の助言・支援<sup>\*5</sup>,
- ⑥自動車等の研究開発支援,
- ⑦道路の企画・設計等に関しての助言・支援,
- ⑧標識・標示等に関しての助言・支援,
- ⑨信号に関しての助言・支援,
- ⑩交通安全システム構築についての助言・支援,
- ⑪その他

しかしながら、これらの諸貢献については、交通心理学が主体性を有しつつ主導権を行使して行ったものは極めて少ない。ほとんどが他からの要請に従い、受動的、従属的に貢献しているのがおよその現状と言えよう。また、これらについて、基盤となる研究が体系的になされておらず、諸貢献の根拠となる研究データは散発的にしか存在しない。

今後ますます増加することが予想される専門的貢献の可能性を考える時、研究の基盤整備の不十分さを痛感せざるを得ない状況と言えよう。

#### B. 一般的な専門性発揮による社会的貢献

一般的な専門性発揮による社会的貢献もいろいろあり、今後、数多くの貢献要請が強まってくるものと予想されるが、現在までに行われてきている社会的貢献の内の主要なものをあげてみると次の通りである。

- ①交通関係法規の規定による講習（「法定講習」）への講師派遣ならびに講習の担当,

- ②関係諸団体の自主的計画による講習会への講師派遣ならびにその担当,
- ③交通心理学関係諸講義内容の計画・立案,
- ④交通安全関係諸行事の計画・立案とその実施,
- ⑤社会における全般的な交通教育の実施,
- ⑥その他。

#### C. 交通心理学が直ちに着手すべきと考えられる社会的貢献

- ところで、交通心理学の分野全般を眺めてみると、①学問としての研究活動、研究関連諸活動は当然継続して実施されるべき（研究活動の体系的視点は必要視されると考えられ、また、研究成果の蓄積とその社会的認識は一層重要視されると思われるが）、②応用科学としての社会的貢献は、高度な専門性発揮の場合であれ、一般的な専門性発揮の場合であれ、従来以上に実行されるべき、と考えられる。

しかしながら、次に記すような事情により、焦眉の急を要する問題が存在している。それは交通界<sup>\*6</sup>における「交通心理学の教育、啓蒙・普及である」。

その根拠となる事情は次の通りである。

- ①現在は自動車の運転は人間によってなされており<sup>\*7</sup>、この「人間への対策について教育を通じて徹底させることが安全への最後の砦である」との認識が深まってきている。
- ②最近の社会において種々の病理的現象、すなわち、親子関係の崩壊、師弟関係の欠如、子供同士の友愛・共感欠如に由来すると推定される“いじめ”、“殺人事件”の発生、等があり、教育の荒廃が叫ばれてきている。この現状を踏まえ、人間教育そのもの、ひいては人間への安全教育のあり方に対しても疑義・危機感が生じてきている。
- ③政府の行政改革・構造改革の方針によって従来、政府主導型で行われてきた諸策等の見直しが強くと求められてきており、人間への交通安全対策、交通安全教育もまた例外ではなくなっている。
- ④新しい世紀を迎え、気分一新が様々な面で叫ばれており、交通安全教育の面についても同様である。
- ⑤日本交通心理学会では交通界で活躍している人々への交通心理学の知識・情報を啓蒙・普及する制度とカリキュラム、並びに資格の認定を検討しつつある。

⑥我が国の某市においては、生涯教育の一環として、交通安全学習プログラムの作成並びに交通学習施設の建設を計画中である。

⑦その他

### 3. 交通心理学特に交通安全教育についての問題点（各論）

#### (1) 交通界における現状

諸々の努力にもかかわらず、交通事故が後を絶たない現状を直視する時、運転者である人間へのアプローチの不足、不徹底、さらには交通安全教育の不十分さが指摘されてきている。

交通安全の基本となる道路交通法が制定されてからかなりの年数を経てきているが、その精神、ならびにそれより派生してきている諸策、諸法において人間心理への留意の必要性が認識され、また、強調されてきており、確かにある程度の浸透度は達成されてきていると思われる。しかるに、それより一足踏み込んだ形では、残念ながら未だ第2の手は打たれておらず、“表面的”な認識のままに終始しているように感じられる。このことが前記のアプローチの不足、不徹底感の源をなしていると考えられる。例えば、「性格<sup>\*8</sup>」、「安全態度」、「人間関係」等の用語は交通安全関係の諸文において散見されるものの、如何にすればパーソナリティ特性上の問題を改善できるのか、安全態度の変容は如何になされるべきか、安全態度の育成はどのようにしてなされるのが適切か、さらには対人関係改善の具体策は？等につき、具体策は示されていないことが多く、それに関する教育もほとんど実施されていないのが現状である。

#### (2) 交通界における交通心理学教育、啓蒙・普及の必要性

高度な専門性発揮による社会的貢献であれ、一般的な専門性発揮による社会的貢献であれ、これに携わる交通関係者に“真の”交通心理学の知見の不足が認識されてきている。

では、何十年にわたる交通心理学の歴史のなかで、何故このような事態が招来されたのか。

考えてみるに、次のような諸状況が関係しているように思われる。

①交通心理学は申すに及ばず心理学という科目が高

等学校までの教育課程に存在せず、短期大学・大学等において初めて受講するような学校教育システムがとられていること。

②さらには、大学の学部において心理学関係の諸科目を受講したり、心理学関係の学部・学科を専攻し卒業した者が受け容れられる余地が交通界には用意されていないこと。

③交通界独自にでも心理学や交通心理学の知識・情報を関係者に教育、啓蒙・普及しなければならない、という発想が存在していないように感じられること。

④したがって、交通界において心理学や交通心理学関係の教育、啓蒙・普及のカリキュラムやプログラムが準備・保有されていないこと。

⑤大学の学部、大学院において交通心理学に関する開講科目が数少ないこと。

⑥その他

#### (3) 必要視されている心理学並びに交通心理学関係の学科目

##### A. 一般的な専門性発揮による社会的貢献に関連するもの

講義と実習とに分けて考えてみる。

##### (A) 講義科目名

###### ア. 心理学の基礎に関するもの

###### ①心理学の基礎

(内容)

心理学という学問の基本と考え方、研究方法、データのまとめ方、及びデータの解釈の仕方、等につき理解する。

###### ②教育心理学

(内容)

教育場面における心理学的な行動理解の必要性、発達・適応と教育成果との関係を理解する。測定と評価、教育心理学的理解の意義も合わせて認識する。

###### ③臨床心理学概論

(内容)

臨床心理学の歴史と意義について理解し、臨床心理学的方法論およびパーソナリティの把握の仕方を学習する。交通において発生する臨床心理的諸問題に対する理解を深め、交通事故後のデブリーフィングの意義とその活用について理解を深める。

#### ④カウンセリング概論

(内容)

カウンセリングの意義・効果について理解し、カウンセリングの種類、手法、カウンセラーの条件について認識する。また、カウンセリングの実際、具体的なカウンセリングの展開等についても学習する。

#### ⑤態度論

(内容)

態度というもの、態度とモラルの関係、態度の形成過程について理解する。態度変容の過程、態度変容をもたらす諸要因についても認識する。情報の受け手と送り手とが態度形成及び変容過程と如何に関係するのかについても理解を深める。

#### ⑥テスト論

(内容)

テストというものをまず理解し、合わせて、テストによる人間諸特性の把握の仕方とその限界について学習し、テストを用いての人間特性の把握の長所・短所および問題点を認識する。テストバッテリーという発想を理解し、テスト実施に際しての留意点も学習する。さらに、交通諸テストの種類と考え方についても認識を深める。

#### ⑦その他

### イ. 交通心理学等の専門に関するもの

#### ①交通安全心理学概論

(内容)

交通安全の基本概念及び交通安全心理学を理解する。また、ドライバーの情報入力の不具合と事故との関係、交通事故の諸要因と人間の不安全特性との関係等についても理解を深める。人間行動からみた人的要因事故発生のメカニズムを認識し、事故傾性とその考え方の変遷についても学習する。

#### ②交通心理学的方法論

(内容)

交通心理学的方法論を詳細に理解し、各方法の有する長所・短所についても正確な知見を得る。交通事故統計データの統計分析法も学習し、合わせて工学的研究法、生理学的研究法についても理解を深める。

#### ③交通社会心理学概論・交通社会行動論

(内容)

交通行動は社会行動であるとの認識のもと、同調行動、模倣等々の交通人の行動の理解を深める。

対人認知、交通におけるコミュニケーションの重要性とその種類、交通社会教育の諸相にも言及し、社会から受ける交通教育効果及び交通文化の影響にも理解を深める。

#### ④交通学習・教育概論

(内容)

交通学習・教育のあり方を理解し、必要とされる教育メディア及び学習結果のフィードバックの意義について理解を深める。また、交通における生涯学習の意義についても具体的な理解を深める。

#### ⑤交通発達心理学・家庭心理学

(内容)

小児の心理・行動特性を理解し、さらに、小児の生育・発達と家庭の役割を認識する。小児・児童に対する交通安全教育の必要性を良く理解し、発達諸段階に応じた交通安全教育の必要性ならびに良き交通社会人育成の必要性を認識する。加えて、高年者の心理・行動特性を理解し、高年者を交通事故から守る家庭のあり方、役割も理解する。

#### ⑥交通安全指導の実際

(内容)

交通安全指導の意義及びその効果を認識し、指導者のあり方、適切な指導環境・場面づくりについての知見を得る。合わせて、事前準備の必要性和妥当とされる受講者数等についても理解を深める。また、指導者として受講者の態度把握を如何に行うか、さらには成果についての評価方法をも学習する。

### (B) 実習名

#### ア. 心理学の基礎に関連するもの

##### ①心理学基礎実習

(内容)

研究計画、調査計画のたて方、ならびに、実験、質問紙調査、行動観察、等の方法論を具体的なテーマに即して学習する。

##### ②テスト実習

(内容)

パーソナリティテスト、安全態度テスト、危険感受性テスト、知能テスト、内田・クレペリン精神検査等の諸テストを実際に実施し、採点法を学習し、結果の解釈とその適用、テスト実施者のあり方についても認識を深め、受講者の心理についても理解を深める。合わせてテストの有する問題点も実体験する。

③態度に関する実習

(内容)

具体的なテーマにつき、態度形成過程ならびに態度変容過程を実体験する。特に立場の異なる人に対する接し方、説得の仕方についても体験学習する。また、情報の送り手及び受け手のあり方と態度との関係についても実習する。

イ. 交通心理学の専門に関するもの

①交通心理学的方法に関する実習

(内容)

実験法 (① 実験室内実験, ② 野外実験, ③ 現場実験, ④ シミュレータ実験), 観察法, 調査法 (① 面接法, ② 質問紙調査法, ③ テスト法), 事故調査法及び交通事故統計データの分析法, 等に関する具体的課題について実体験を行い, 合わせて達成度についての自己評価も行う。

②交通安全指導に関する実習

(内容)

指導の効果, 指導のあり方, 指導環境の設定の仕方, 適切な受講者数等について実体験を通じて学習するとともに, 受講者の態度把握についても具体例を通じ体験する。

③その他

B. 高度な専門性発揮による社会的貢献に関連するもの

講義と実習とに分けて考えてみる。

(A) 講義科目名

ア. 交通心理学等の専門に関するもの

①交通組織行動論

(内容)

組織とは?, および組織のあり方の理解をし, 組織行動と人間関係, リーダー及びリーダーシップのあり方の認識を深める。産業・交通における組織のあり方と集団行動の理解, 交通事故の企業責任等の理解を行う。

②交通教育技法

(内容)

交通教育者のあり方, 教育者と受講者の関係づくりを良く理解し, 教案の作成の仕方を学ぶ。受講者の動機づけの実際, 有益な動機づけのノウハウをも学ぶ。

③小集団活動

(内容)

討論の意義を理解し, 小集団による討論およびその結果の提案の成功例についての知見を得る。小集団活動の長所・短所を含めた諸相への認識をも深める。また, 小集団活動のリーダーの選出, 小集団活動に相応したテーマの選定, 討論の進め方の実際, 創造的発見の実際, 等への理解を深める。

④交通人間工学

(内容)

人間工学とは?, 及び人間工学の歴史特に交通人間工学の歴史・今後について学ぶ。人間工学の視点より見た自動車のあり方, 交通システムのあり方についての知見を得る。自動車・道路・信号を含めた交通管制システム等の全交通システムについて人間工学的配慮例ならびに成功例について知識・情報を得る。人間中心の交通システム, 特にバリアフリーの交通システムへの認識を深める。これらの諸問題・諸対策についての国際的視野の習得もはかり, 最新技術の導入についての知見も得る。

⑤交通事故分析

(内容)

交通事故の発生過程や交通事故の関連諸要因を理解し, 交通事故調査のシステムと調査方法についての理解を深める。交通事故モデルとその展開を学び, あわせて交通事故分析データの精度向上の必要性及びその活用上の配慮についての認識を深める。

⑥グループカウンセリング論

(内容)

グループカウンセリングの意義, カウンセリングとグループカウンセリングの相違, グループカウンセリングの長所・短所等について理解する。また, グループカウンセリングの手法を学び, 交通におけるグループカウンセリングの成功例について知見を得る。

⑦交通臨床・福祉論

(内容)

欲求の達成と交通行動, 適応・不適応の手段としての交通行動に関して理解する。運転とアルコール, 薬物服用並びに心身の障害と運転・通行行動との関係についても認識する。自動車を用いての徘徊, 疾病・疾病回復・事故よりの回復と運転等の諸問題への対応に関しても理解を深める。さら

にまた、交通遺児・交通事故関係者の家庭への支援の必要性、交通事故からの精神的立ち直りに対するケア、交通事故関係者への経済的・人的な社会支援のあり方等についても認識を深める。

#### ⑧カウンセリングの実践

(内容)

カウンセラー及びクライアントの心理の理解、カウンセリング実践に際しての具体的な諸対応について学び、交通カウンセリングについての実例、交通カウンセラー育成に関する諸対応、カウンセラー育成策とロール・プレイングの導入についても理解を深める。

#### ⑨ロール・プレイングの技法

(内容)

ロール・プレイングの意義と長所・短所、交通心理学におけるその活用上の諸相等についての理解を深める。また、ロール・プレイング実施上の諸留意点に関し知見を得る。

#### ⑩テスト作成と実施

(内容)

テストの構成、人間行動モデルとテストの構成の関係、テストの改訂に際しての留意点を理解し、交通関係各テストの具体的な内容とその特徴についての知見を得る。

### イ. 交通心理学等の基礎に関するもの

#### ①パーソナリティ論

(内容)

パーソナリティの形成過程とその変容への影響諸要因についての知見を深める。種類別の診断テストの実際を理解し、パーソナリティと交通行動、望まれる交通人のパーソナリティを認識する。

#### ②認知心理学論

(内容)

認知心理学の歴史を理解し、認知心理学の人間及び人間行動理解への視点を学ぶ。認知心理学全般を概観した後、交通行動・社会的行動・ミスの発生等についても認知心理学的視点より再考する。

#### ③生命・救命・救急システム論

(内容)

生命の生物学的、医学的、心理学的、哲学的意味についての認識を深め、生命の尊厳を深く理解し、救命のあり方、具体的な救命法についても学ぶ。また、救命・救急には時間的緊急性を要することから、救命・救急システムのあり方、その社

会的実現性についても理解を深める。

#### ④その他

### ウ. 交通心理学等に関連するもの

交通心理学等における認識、理解の基礎として、直接、間接的に影響すると考えられるものは次のものである。

#### ①交通環境論

(内容)

交通公害防止の立場から、交通の安全性と快適性を提供する環境のあり方を理解する。また、具体的な観点から、道路、自動車、休憩諸施設、自然環境等の例につきあるべき姿への認識を深める。

#### ②交通文化論

(内容)

交通文化の意義、交通文化の形成とその維持について理解を深める。子供の発達に及ぼす交通文化の役割、交通行動全般へ及ぼす交通文化の影響について認識を深める。

#### ③文化人類学

(内容)

個体発生と環境との関わり合いを理解し、交通行動と国民性ならびにその由来に関しての認識、特に、価値観・風土・民族意識・宗教観等と交通行動の関係について理解を深める。

#### ④その他

### (B) 実習名

#### ①交通教育指導の実習

(内容)

交通界において必要とされる公的並びに非公的の教育場面、例えば、安全運転管理者講習、運行管理者講習、指導員講習、企業内カウンセラー養成講習、及び交通安全協会等の主催する講習、さらには個々の企業内・組織内講習等の教育場면을想定・選定し、それぞれに即した教育技法を体験する。また、それらの体験を通して教育担当者のあり方、話し方、受講者の動機づけ、教育成果の向上策等についての実体験の把握を行う。

#### ②小集団活動の実習

(内容)

現場あるいはその模擬的現場における小集団活動の実際を体験し、その意義、議論の対象となるテーマの選定、活動の進行に際しての留意事項、創造的な結果の導出の仕方、等について実体験的

に把握を行う。

③カウンセリングの実習

(内容)

交通現場,あるいはその模擬的現場におけるカウンセリングの実際を体験し,カウンセラーとクライアント間の信頼関係の確立,カウンセラーの具有すべき条件,積極的傾聴,クライアントの心理過程の表出,及びカウンセリング実施に際しての留意事項等を実験的に把握する。

④グループカウンセリングの実習

(内容)

交通現場,あるいはその模擬的現場におけるグループカウンセリングの実際を体験し,その意義,カウンセリングとの相違点,実施に際しての留意事項,その効果,等についての実験的把握を行う。

⑤テストの作成と実施の実習

(内容)

模擬的に交通安全テストを作成し,妥当性及び信頼性を踏まえた追跡調査を実習し,テストの作成及びその改訂に際しての留意点を体験する。これらの実験に基づき,テスト実施のあり方を実験的に認識する。

⑥交通事故分析の実習

(内容)

交通現場,あるいはその模擬的現場において,交通事故分析の実際を体験し,時間的経過を踏まえた事故要因の関連の仕方を明らかにし,それらの関連状況をイベントツリーやバリエーションツリー図にて描出する。加えて,交通事故の統計データの分析も行い,各交通事故要因と交通事故との関係を実験的に把握する。さらに,これらのデータの交通裁判等への活用の実例等にも触れる。

以上,一般的専門性発揮による社会的貢献及び高度な専門性発揮による社会的貢献に関係し,専門的知見を行使する人々に対する交通心理学の教育,啓蒙・普及の必要性,ならびに必要と感ぜられる内容を示した。

しかし,このようにして養成・育成されたこれらの専門家がたとえ専門的知見は十分に得たとしても,実際に円滑かつ活発な活動を展開し,真に社会的貢献が十分に可能となるのには組織上の彼等の上位にある人々の理解と支援が必要となる。

したがって,これら上級の管理者,経営者等にも交通心理学の認識・理解が必須となってくると思われる。

(4) 上級の管理者,経営者等に必要視される広範囲な専門的知見

このような立場,職位にある人々に必要とされる専門的知見の内容は,単なる交通心理学の知見のみではなく,さらに広範な経営・組織運用に必要とされる諸知見も絡めた“人間理解”,さらには,社会的責務をも含めた“人間理解”が必要視されると思われる。

それらの内容の例を示すと次のようである。

①交通科学基本論,②環境科学基本論,③人間科学基本論,④応用心理学基本論,等。

(A) 交通科学基本論

(内容)

交通ネットワークの社会における役割,交通の歴史的展望,交通と環境・交通と公害との関係を理解し,さらに,救命システムの社会的構築の必要性を認識する。

(B) 環境科学基本論

(内容)

交通社会が自然環境に与える影響,自然環境と都市化,公害問題と環境破壊,及び交通と都市化,等について認識を深める。

(C) 人間科学基本論

(内容)

人間とは?の基本,生物・人間の生命・生活,その発達,社会科学的観点からの人間観等についての知見を広める。さらに,大脳活動と人間,人間の社会化,経済・技術の発展と人間等について理解し,人間中心社会の将来像についての確かなる見解を求める。

(D) 応用心理学基本論

(内容)

応用心理学の真の姿を知り,応用心理学のあり方及び社会的貢献のあり方を考究する。実践活動と応用心理学について深く認識し,応用心理学のストラテジーと方法論を把握する。応用心理学と交通心理学との関係を究め,応用心理学を志す後継者育成の必要性とその具体策を認識する。さらに,応用心理学に対して学問的,社会的評価をくだす。



#### 4. 結 言

日本交通心理学会も創立 20 年余を経過し、世紀も新しく変わった。わが国の行政の組織も変わり新たなシステム構造改革の動きもかなり具体化しつつある現在である。

この期に、わが国の交通界をもう一度見直し、運転者・通行者等の人間重視の観点から交通心理学の今までの足どりをふり返り、要改良点、要努力部分、未着手部分等を可能な限り明らかにせんとした。

なかでも特に、社会的貢献に関し、焦眉の急を告げられていると目される教育、啓蒙・普及の点に着目し、問題点の所在を明らかにし、さらに、一般的、ならびに高度な専門性を発揮して社会的貢献すべき点をあえて提言してみた。

多々批判の余地はあると思われるが、本稿を討議の基とし、多くの交通心理学等の専門家、交通関係者によって検討が加えられ、より多くの努力が積み重ねられて、交通心理学が確固たる学問となり、同時に真に交通界に実践・活用可能な専門的知見等を豊かに提供して、交通の安全性、円滑性、快適性に貢献できることを願い、あえて本稿を表した次第である。

#### 参考文献

- 1) Koshi,M. 2000 Built-in Social/Administrative Mechanism for Traffic Safety.  
A historical overview on road accidents in Japan. Holst,H.v., Nygren,Å. and Andersson,Å ,E.(Eds.), Transportation, Traffic Safety and Health-Human Behavior-, Berlin: Springer, P p107-116.
- 2) 長塚康弘 1990 日本における交通心理学研究の展開 交通心理学研究,6 (1),Pp1-13.
- 3) 日本交通心理学会 1995 日本交通心理学のあゆみ, Pp1-41.

#### 注

\*1 航空に関しては旧名「日本航空宇宙医学心理学会」が設立されており、現在は「日本宇宙航空環境医学会」として活動している。交通は本来、総合科学であり、行政・医学・交通工学等の他分野との総合的活動組織としては「日本交通科学協議会」が存在し、活発な活動を展開している。また、交通に関する「視覚」、「眼科」等の研究活動の場としては、旧名「目と道路交通研究会」があり、現在は「日本労働・産業・交通眼科学会」として活動している。

\*2 企業開発センター交通問題研究室刊

- \*3 日本交通心理学会は、「提案し、行動する学会」を標榜しており、その意気込みは盛んである。
- \*4 ケースバイケースながら学識経験者としての出廷、法廷審議における研究データの活用等での貢献はある。
- \*5 クラクションに関する公的義務化の提案（日本応用心理学会交通部会より）並びにその弾力的な運用に関する助言の例等がある。
- \*6 交通心理学のみならず、関係する諸分野を総称してこのような名称を用いる。
- \*7 技術的には無人自動車も可能とはなっているが、諸設備建設上の社会資本投下の問題、運転の楽しみを求める人間心理からの声等あり、当面は有人自動車が必要視されている。
- \*8 心理学の専門用語の「パーソナリティ」と同義に用いられている。